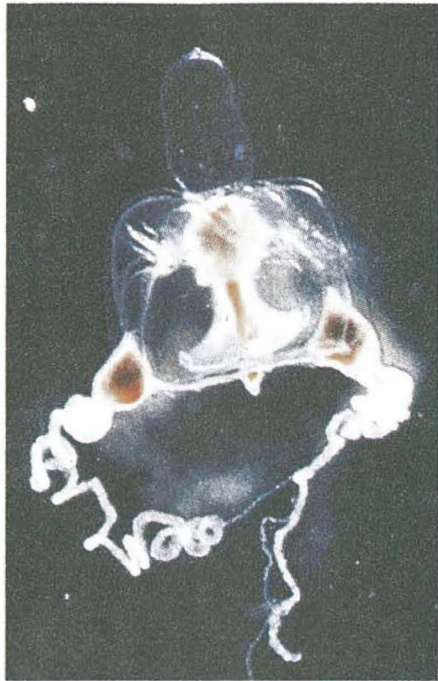


ツリアイクラゲ



2本の長い触手が特徴のツリアイクラゲ

久保田 信

29



この小さなツリアイクラゲの特徴は、向かい合ってまるで釣り合いを取っているかのように見える2本の長く伸張する傘縁触手があることだ。2本の触手のほかに、傘の縁に短く小さなこぶ状の突起が少数で起っている。最多で14個

あり、これらも触手のように釣り合いが取れている。こぶ状の突起のうちの2触手と直交する相対の2個だけが、ほかのよりもずばぬけて大きい。ツリアイクラゲが属する花クラゲ類には、傘の縁にある触手の基部の膨らみに眼点があるものが知られているが、本種には一つもない。光に対して敏感ではないだろう。これらの少数の痕跡的な膨らみには刺胞が詰まっているので、攻撃と防御に使う。進化的には、昔、触手を多数はやしていた名残かもしれない。

傘のてっぺんには長い突起

があって、このような形のクラゲはほかにもいて「えぼし」の名前が付けられている。突起の形は太いものから細いものまでいろいろある。その機能は不明だ。そんな突起があっても、傘高は3ミ以下しかない。

放射管は普通のクラゲと同じく、4本ある。生殖巣はフラスコ状の口柄を取り巻いて形成される。口柄に形成される生殖巣はしわ状で、少し複雑な形をしているのが特徴だ。口柄の先端に形成される口唇は、シンプルで大きく広がっているが、主な餌生物は分かっている。外国産ではポリプが見つかっており、群体性で、ヒドロ茎あるいはヒドロ根上にクラゲ芽を形成する。しかし、日本産では未確認。よく似たポリプがいっぱい海にいたので、飼育して生活史を回さないとそれらの正体はよく分からない。田辺湾で普通に採集できるクラゲだが、まだまだ謎が多い。

(京都大学准教授)